



Title	日本語の文における提題について : 叙述の類型の観点から
Author(s)	大竹, 政美
Citation	教授学の探究, 8, 19-25
Issue Date	1990-03-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13564
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p19-25.pdf



日本語の文における提題について

—— 叙述の類型の観点から ——

大 竹 政 美

(北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程)

0. はじめに

われわれの見解では、国語教育と外国語教育は、学校教育の教育課程全体の中で、「言語の獲得[(spontaneous language acquisition)]」「を基底とし、そのうえに乗る言語の習得[(guided language learning)]」(高村ほか 1987:572)に関わる、相互に依存・支持・促進しあう、言語教育の教科群という統合された領域を成す。教科カリキュラムの基本部分の構造に関する限り、両者の間には違いがないと想定してさしつかえない(大竹 1988:37)。

われわれは、学校教育の一環としての言語教育の目的を、日本語または英語のような「言語の知識の形成」と設定している(大竹 1988:42)。「言語の知識」とは、言い換えれば、「言語的コミュニケーション能力」(大竹 1989:129)であって、「文法」の知識と「語用論」の知識から成る(大竹 1989:130)。

このような観点から、高等学校段階での国語教育において、文法の知識を形成する一連の教授プログラムを作成しようとする場合に、そのような教授プログラムの作成のための教育内容研究は、どんなものとして構想されるであろうか。本稿では、「日本語の文における提題」の教授プログラムを作成するための教育内容研究を、叙述の類型の観点から構想しようと試みる。

1. 文の組み立て

「提題」の指導を論じるための予備的説明を、1～2で、益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法』(1989)に依拠して行なっておこう。

「言語表現の最も基本的な単位」は「文」である。「文章 [=テキスト] や談話」は、「複数の文の有機的な組合せ」によって構成される。

「文の組み立て」の骨格は、「述語」、「補足語」、「[述語の] 修飾語」、「主題」から成る。

「述語」は、「文末の位置で文を支える」。「述語」は、「文の中心的な要素」であって、「文の大枠」を決定する。たとえば、

- (1) 太郎が重い荷物を軽々と運んだ。

という文では、文末の「運んだ」が述語であり、「運んだ」という述語が、「文の骨格を定める働き」を持っている。

「述語が[集約的に]表す事態」には、「人やもの」がさまざまな形で関係する。(1)の文では、運ぶという事態に「太郎」と「荷物」が関係することが表現されている。この文では、「太郎が」

と「重い荷物を」が、運ぶという「事態が成り立つために必要となる」,「動きの主体と対象」を表している。「太郎が」,「荷物を」のような、「述語が表す意味を補う働きをする」要素を「補足語」という。

「述語に関係する文の要素」には、補足語のほかに「〔述語の〕修飾語」がある。「修飾語」とは、一般に、「与えられた表現に付加的な情報を加え、より精密な記述を与える働きをする」要素である。(1)では、「軽々と」という表現が、述語「運んだ」の修飾語として働いており、運ぶという事態の様子を述べている。「修飾語」には、その他に、「名詞を修飾するもの」がある。(1)における「重い」は、名詞「荷物」の修飾語として働いている。

一般に、「X へ～述語」という形の文は、「X に関する何らかの陳述」であるといえる。たとえば、

(2) 次郎は仕事で忙しい。

という文は、「次郎」という人物を取り上げて、「仕事で忙しい」という説明を与えている。このような、「〔X は〕」の形で文の陳述の対象を表す要素を、「主題」という。主題になるのは、多くの場合、「述語の補足語」である。「主題の有無」によって、(2)のような「有題文」(主題を持つ文)と、(1)のような「無題文」(主題を持たない文)とが区別される。

「述語」,「補足語」,「〔述語の〕修飾語」,「主題」の「語順」は、次の通りである。述語は原則として「文末の位置」を占め、主題は「文頭」に現れることが多い。補足語と修飾語は「主題と述語の間」に置かれる。「補足語と修飾語の前後関係」,「補足語どうしの前後関係」,「〔述語の〕修飾語どうしの前後関係」は、「比較的自由」である(益岡・田窪 1989:3-4)。

2. 提 題

2.1 提題助詞

益岡・田窪(1989)は、「主題を提示する働きをする助詞」を、「提題助詞」と呼ぶ。提題助詞には、「は」,「なら」,「ったら」,「って」などがある。主題は一般に、「名詞〔句〕と提題助詞」で構成される。たとえば、

(3) 鈴木さんは、街で旧友に会った。

という文では、「鈴木さんは」が主題である(益岡・田窪 1989:45-46)。

「主題の代表的な表現形式」は、このような「名詞〔句〕+は」の形式である。「は」は、提題助詞の中で最も重要なものである(益岡・田窪 1989:130)。

2.2 提題助詞「は」と格助詞

主題を提示する「は」と「補足語の述語に対する関係を表す格助詞」とは文法的な働きが異なるので、「一つの名詞〔句〕がこれら2種の助詞を伴う」ことは珍しくない。その場合、「は」は格助詞に後続する。

- (4) 神戸では先月、神戸まつりが行われた。
- (5) そのホテルからは、街全体が見渡せる。

格助詞の中で、「が」と「を」だけは、提題助詞「は」とともに用いることができない。「は」が用いられる場合、「が」と「を」は表現されない。

- (6) 太郎はテレビのスイッチを入れた。
- (7) この本はどこで買いましたか。

これらの例における「太郎は」と「この本は」は、格助詞で表せば、それぞれ「太郎が」と「この本を」となる(益岡・田窪 1989:131)。

3. 「は」と「が」——文型教育の観点から——

「は」と「が」の問題は、母語教育としての国語教育とは区別される外国語教育としての日本語教育において、「どういう原理で文を類型としてとらえ、どういう順で配列するかという側面」からは、どのように取り扱われているのだろうか。寺村秀夫「構造文型と表現文型」(1989)を見てみよう。

文法的に言えば、「が」は、「主格を示す助詞」、つまり、「を」、「に」、「へ」、「から」などと同類の格助詞であって、「[多くの場合、]いろいろな格に立つ名詞〔句〕〔=補足語〕を取り立てて『主題』として掲げる働きをもつ」「は」とは構文機能が大きく異なる種類の助詞である。そういう「構造的な把握」からすれば、指導の「順序」は、まず、「客観的な叙述内容」(渡辺実)あるいは「コト」(三上章)を「格助詞の使い分け」によって類型化して、「文型」として与え、その次に、文型の中の「名詞〔句〕」あるいは「名詞〔句〕+格助詞」を「は」(その他の係助詞)〔=益岡・田窪(1989)の「提題助詞」と「取り立て助詞」〕によって取り出し、「主題をもつ文」あるいは「なんらかの対比的な意味をもつ構文」をつくる「操作」を教える、というものであると考えられるかもしれない。しかし、「人間相手の教育」では、「文型の実用性」を無視するわけにはいかない。「どういうタイプの述語については、『は』からはじめ、どういうタイプなら『が』からまず教えるか」ということが問題になるのである(寺村 1989:173-174)。

われわれが高等学校段階での国語教育において、「日本語の文における提題」の教授プログラムを作成しようとする場合にも、その教授プログラムの作成のための教育内容研究は、寺村(1989)が言うように、述語のタイプによって「は」と「が」をどう使い分けるかという観点から構想するべきである。

4. 文の有題性——状態述語／動態述語の区別——

「文が有題文になるか無題文になるか」は、「述語が状態述語であるか動態述語であるか」に關係する(益岡・田窪 1989:132)。

「述語が〔集約的に〕表現する事態」は、「動き(動的事態)」と「状態(静的事態)」に大別される。動きを表す述語を「動態述語」、状態を表す述語を「状態述語」という。(1)の「運んだ」

は動態述語の例であり、(2)の「忙しい」は状態述語の例である（益岡・田窪 1989：3）。

4. 1 文の述語が状態述語である場合

「述語が状態述語である文」は一般に、「有題文」になる。この場合、述語は「主題の属性（性質・特徴）や状態」を表す。

- (8) 日本人は勤勉だ。
- (9) 花子は忙しい。

反対に、「状態述語」であっても、それが「人やものの属性」を表す場合には、「有題文」になる。

- (10) 新幹線は時速 200 キロぐらいで走る。
- (11) 刺身は生で食べる。

「状態述語の文が主題を表す形式を持たない」場合としては、主として、「主題が省略されている」場合と、「述語の部分が主題の役割を果たす」場合がある（益岡・田窪 1989：132）。

- (12) 太郎はよく物を置き忘れる。きのうも、電車の中に傘を置き忘れた。（2番目の文で、「太郎は」が省略されている。）
- (13) 鈴木さんが責任者だ。（「責任者は鈴木さんだ。」の意味）

4. 2 文の述語が動態述語である場合

「述語が動態述語である」場合には、「有題文にも無題文にもなり得る」。無題文になるのは、「客観的に観察される出来事や動作をそのまま描写する」場合である。この種の文は、「現象をありのままに描写する文」という意味で、「現象文」などと呼ばれる。

- (14) バスが来た。
- (15) 突然、雨が降りだした。
- (16) きんの午後、太郎が訪ねて来た。
- (17) 会議が定刻に始まった。

ただし、「状態述語」であっても、それが「一時的な状態」を表す場合には、「現象文」になることができる。

- (18) 空が真っ暗だ。
- (19) 近所が火事だ。
- (20) 外に誰かがいる。

対照的に、有題文になるのは、「ある主題を設定して、それが関係する出来事や動作を表現す

る」場合である（益岡・田窪 1989：132-133）。

- (21) 太郎は、きのうの午後私に会いに来た。
- (22) 会議は、予定通り3時に始まった。

5. 文の有題性（続）——属性叙述／事象叙述の区別——

4. で見たように、「文が有題文になるか無題文になるか」が、「述語が状態述語であるか動態述語であるか」によって決定されるのは、第一近似としてでしかない。われわれは、文の有題性の規準を、何か別のものに求めなければならない。

5.1 叙述の二つの類型

益岡隆志『命題の文法——日本語文法序説』（1987）は、「現実世界を対象として或るひとまとまりの事柄を概念化すること」を「叙述」と呼んでいる。叙述には、「性格を異にする2つの類型」、すなわち、「属性叙述」と「事象叙述」を認めることができる。

「属性叙述」とは、「所与の対象が有する属性（性質や特徴等）を叙述すること」である。属性叙述を表現する「属性叙述文」〔たとえば、(8)～(11)〕は、構造的には、「対象を表示する成分」と、「その対象の属性を表示する成分」から成る。

- (23) 山口先生は生徒にきびしい。

という属性叙述文は、対象表示成分である「山口先生は」と、属性表示成分である「生徒にきびしい」から成っている。

他方、「事象叙述」とは、「出来事（動き）または静的事態（一時的状態）を叙述すること」である。事象叙述を表現する「事象叙述文」〔たとえば、(14)～(22)〕は、「事象の全体像を集約的に表す述語」と、「事象への関与者を表す名詞句」〔＝補足語〕を中心に構成される。

- (24) 山口先生が生徒をしかった。

という事象叙述文は、述語である「しかった」と、補足語である「山口先生が」、「生徒を」から成っている（益岡 1987：39-41）。

5.2 叙述の類型と文の有題性

「属性叙述文」は、「対象表示成分が主文（主節）において一般に『主題』の形式で表される」。 (23)における「山口先生は」は、この文の主題であり、「生徒にきびしい」は、その「解説」である。主文に現れる属性叙述表現が、

- (25) 山口先生が生徒にきびしい。

というような無題文の形式をとる場合には、「問題の対象の中で X だけが」という意味の「総記」

の読みが与えられる。

他方、「事象叙述文」は、「有題文・無題文」のいずれにもなりうる。たとえば、

(26) 山口先生は生徒をしかった。

は、無題文(24)に対応する有題文である(益岡 1987:40-41)〔ただし、1.と6.を参照〕。

「属性叙述文が一般に有題文の形で表現される」理由は、「属性叙述の基本的特徴が、或る対象を取り上げその対象に認められる何らかの属性を叙述する点にある」というところに求められる。また、「事象叙述文が有題文になるか無題文になるか」は、基本的には、「談話のレベルでの条件」に依存する(益岡 1987:23-25)。

6. 主題になりうる名詞句

主題になるためには、名詞〔句〕が、「話の流れ、発話場面の状況、常識等から、どの対象を指し示しているかが特定できるもの」でなければならない。

(27) 一人の男が私に話しかけてきた。その男はペンと手帳を手にしていた。(「その男」が指し示しているのは、前文で導入された「一人の男」である。)

(28) きょう近くで火事があった。原因はまだ不明だ。(「原因」は、前文の「火事」の原因を示す。)

(29) これは私の兄です。(「これ」が何を指し示しているかは、発話場面の状況から明らかである。)

(30) 日本語は、複雑な文字で書かれる。(「日本語」が何を指示しているかは、常識から明らかである。)

「指し示している対象が特定できない(不特定の)もの」は主題にすることができない(益岡・田窪 1989:130-131)。

(31) * 一人の男は私に話しかけてきた。

また、「だれ」、「何」、「どれ」などの「疑問詞」も主題になれない。「話し手にとって正体不明のもの」について、陳述を行うことはできないからである(安藤 1986:147)。

(32) * だれは、来たのか。

(33) * 何は、欲しいのか。

(34) * どれは、花子のか。

なお、「ガ格が疑問語を含む文」(たとえば、「どの人があなたのお兄さんですか。」や「だれが歌っていますか。」)を除いて、「疑問語が現れる文」は、原則として、主題を持つ(益岡・田窪 1989:131)。

- (35) 市役所はどこですか。
 (36) コンサートはいつ始まりますか。

久野 暉『日本文法研究』(1973)によれば、主題は、「総称名詞句」か「文脈指示の名詞句」でなければならない。後者は、「既に登場した事物を指す名詞句」か、「話し手と聞き手との間で、指示対象が明らか名詞句」である(久野 1973:29-30)。

- (37) 鯨は哺乳動物です。〔総称名詞句〕
 (38) 太郎は私の友達です。〔文脈指示〕
 (39) 二人はパーティーに来ました。〔「その二人」の意味〕

5. で言及した二種の叙述文は、どのような名詞句を主題として取りうるかという点でも異なっている。「文脈指示の名詞句」は「属性叙述文の主題にも事象叙述文の主題にもなれる」のに対して、「総称名詞句」は、原則として、「属性叙述文の主題にしかなり得ない」。

- (40) 日本人は勤勉だ。
 (41) 若者は流行を追いかける。

という例が示すように、総称名詞句が属性叙述文の主題の位置に現れることは珍しくない。他方、同様の例を事象叙述文の中に見出すことは困難である。事象叙述文のように見える

- (42) 恐竜は中生代に繁栄した。

などの例も、「総称名詞句を主題とする」(「～というものは」の意味で用いる)限り、「対象の属性を表現する」性格が強くなる(益岡 1987:41-42)。

参 考 文 献

- 安藤貞雄. 1986. 「主語と主題」, 『英語の論理・日本語の論理』, 大修館書店, pp. 142-168.
 久野 暉. 1973. 『日本文法研究』, 大修館書店.
 益岡隆志. 1987. 『命題の文法——日本語文法序説』, くろしお出版.
 ———・田窪行則. 1989. 『基礎日本語文法』, くろしお出版.
 大竹政美. 1988. 「言語教育の教科カリキュラムの基本部分の構造について」, 『北海道大学教育学部紀要』51, 37-50.
 ———. 1989. 「コミュニケーション文法としての教育英文法——英語の態への適用——」, 『北海道大学教育学部紀要』52, 129-144.
 高村泰雄・寺岡英男・倉賀野志郎・若菜博. 1987. 「あとがき」, 高村泰雄(編著)『物理教授法の研究』, 北海道大学図書刊行会, pp. 571-573.
 寺村秀夫. 1989. 「構造文型と表現文型」, 寺村秀夫(編)『日本語教育教授法(上)』, 『講座日本語と日本語教育13』, 明治書院, pp. 165-180.